平安時代上流社会の被服の考察

（第　六　報）

松　井　和　哥　　藤　本　や　す

Waka Matsui and Yasu Fujimoto

A Study on the Costumes of the Court Nobles of the Heian Period (Part 6)

The Report 5 treated of "uwagi", "uchiginu" and "itsutsuginu" which constitute the main parts of the formal court costume for woman.

This is the study about constitution, cloth, color, pattern, cutting and sewing of "hitoe", "nagabakama", "hirabitai, saishi, kushi (hokei)", "tato-gami", "hiogi (akome-ogi)", and "shitozu" which constitute the main part of the formal court costume for women popularly known as "jūnihitoe" corresponding to "sokutai" costume.

緒　　言

本学紀要第7，8集において女子の晴の服の表着，打衣，袿（五衣）について発表して来た。今回はその下に着用する単，袴，襪および髪上げに用いる平額・釵子・櫛その他帖紙，桧扇（祖扇）について考察することとする。単は十二一重の一番内側に重ね着するもので袿と同じ形で上に着る衣より身丈を長くし，袴は奈良時代の下袴が表袴（うえのはかま）化するにおよび丈は長く幅は広く誇張され，丈・腰（紐）共に身分の高いものほど長いものを用いた。平額・釵子・櫛は高貴のものが儀式のときに用いる髪上げの具であり，この装飾は奈良時代の結髪の装飾（寶髻（ほうけい））にならったものである。

単

単は「ひとえ」と呼び十二一重の袿（五衣）の下に着用するもので裏をつけず夏冬ともに単で表着・打衣と同様に袖は広袖，衿は垂領で丈は衣（きぬ）より3寸（11.4 cm）長い。夏は板引（ひへぎ），冬は張単（はりひとえ）で，ひへぎは綾を板引にして引きはがしたもので光沢があり，はりひとえは練ったままのものをいう。古くは夏に生絹（すずし）またははりひとえを二枚合わせた単重ねを着用し，この下に単を用いた。

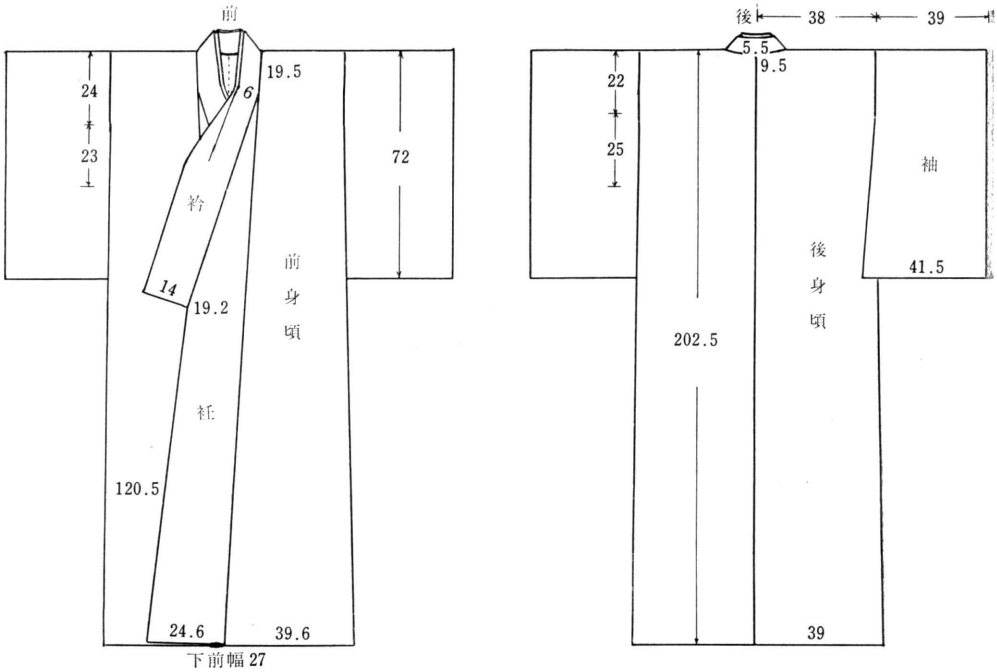
布地・色・文様

単の布地は綾が多く，夏は精好（せいこう），生絹（すずし）などが用いられた。文様は幸菱，花菱，繁菱，遠菱，襷に花菱などの菱文が主で，色は紅，萠黄，濃（こき）色，蘇芳，葡萄（えび）色，朽葉，青，夏は白，淡蘇芳，女郎花，淡朽葉が用いられ季節により上に重ねる衣との色目の調和に趣好をこらした。

構　成

単は垂領で広衿，袖は一幅の広袖で身丈は束帯の単と異なり上に着る衣より3寸（11.4 cm）長

1図 単出来上り図

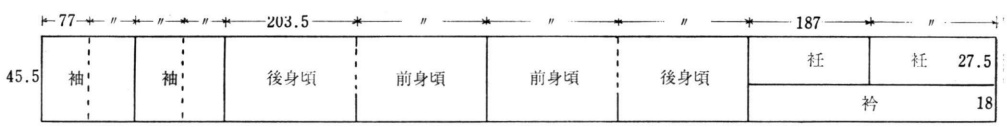


く，袖口，振八つ口，衿下，裾，衿は端を撚りぐけにする。

裁ち方

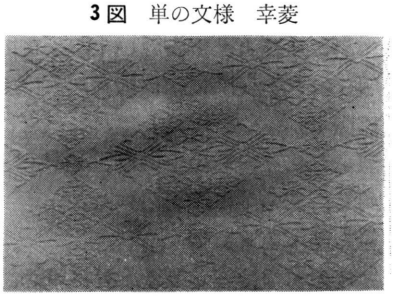
袖，身頃，衽，衿の文様を合わせて2図のように裁つ。

2図 単裁ち方図



縫い方

3図 単の文様 幸菱



1. 袖 ① 袖口，振八つ口をそくひを用いて撚りぐけをする。② 袖下縫い代の両端を三角に縫い，袖下を袋縫いにして前袖の方へ折り表返す。

2. 裾・背縫い 脇縫い ① 後身頃，前身頃の裾を撚りぐけにする。② 背を衿肩明から裾まで縫い合わせ左身頃の方へ折り，背縫い代の下部を三角に折り縫い代にとじつける。③ 後脇縫い代を自然に斜に折り身八つ口から裾まで縫い合わせ，前身頃に折り縫い代の下部を三角に折って縫い代にとじつける。

3. 衽つけ 衿下・裾を撚りぐけにし，身頃と衽を縫い合わせ衽の方へ折り縫い代の下部を三角に折って縫い代にとじつける。

4. 衿つけ ① 衿の外側と衿先を撚りぐけにする。② 衿幅を 14 cm にして衿をつける。③

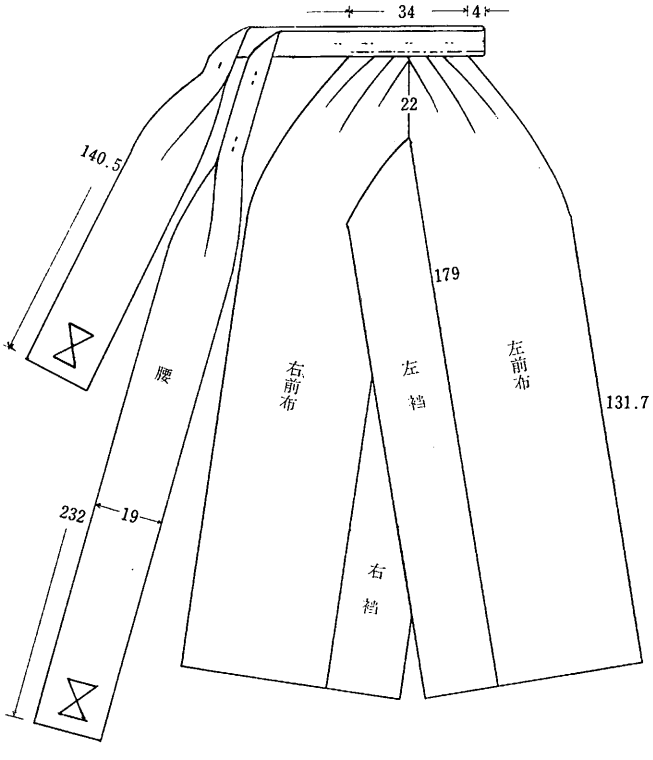
着装のときに衿幅を 5.5 cm にして撚りぐけの太さだけ差をつけて折り下は自然に斜めに開き折り山を二目落しでとじる。（出来上り図参照）

5. 袖つけ 袖山と肩山を合わせて前は 24 cm，後は 22 cm 袖をつけ袖の方へ折る。

袴

袴は下袴から発達したもので奈良時代の裙（上裳）の上部の幅が平安中期頃より縮小して平安後期には背部の幅になり裾を引き形式化するにつれて下に穿いていた袴が表袴化して丈が長く誇張されるようになった。長袴は装束の一番下に着用するもので腰は一筋の長いものを右脇に片鈎（片わな）に結び下げて着用する。紐の長さは身分の高いものほど長くなる。袴には袷と単の袴とがあり夏冬共に用いられ，単の袴は丈が短く「服飾管見」によれば「かの御料の単の御袴の多きは御身にしたしきものなればなるべし」と記るされている。したがって単の袴は下袴として用いられたものであろう。

4図 袴出来上り図



布地・色

袴の布地は綾，平絹，生絹，精好が用いられ，生絹は夏および褻の場合に多く，後世は殆んど精好を用いている。布地は打にするものと張にするものとがあり，打は砧で打ったものをいい，張は板引にして張を出したもので打袴や張袴の名がある。色は紅であるが若年のものは晴の時に濃色を用いた。今日もなお宮中における御儀式にはこれが行われている。平安末期頃には夏や褻の場合に白，薄蘇芳，蘇芳，青，萠黄などの色も用いられた。

構成

長袴は袷仕立であり打袴のように表布と裏布とでできているものと，張袴のように表・裏が共布で裾を引返しにしたものとがある。4図のように片脚が前布，後布，襠でできていて左右二布づつで上部に襞をとり一筋の腰（紐）を右脇であけるようにつける。

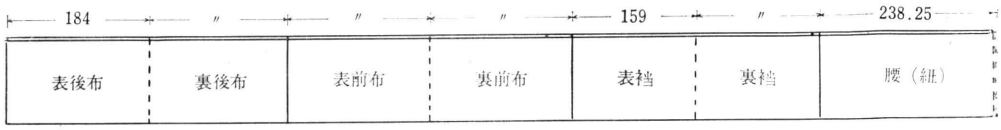
裁ち方

布幅1尺2寸（45.5 cm）5図のように後布，前布，襠を引返しにして2枚づつと腰（紐）を裁ち合わせる。

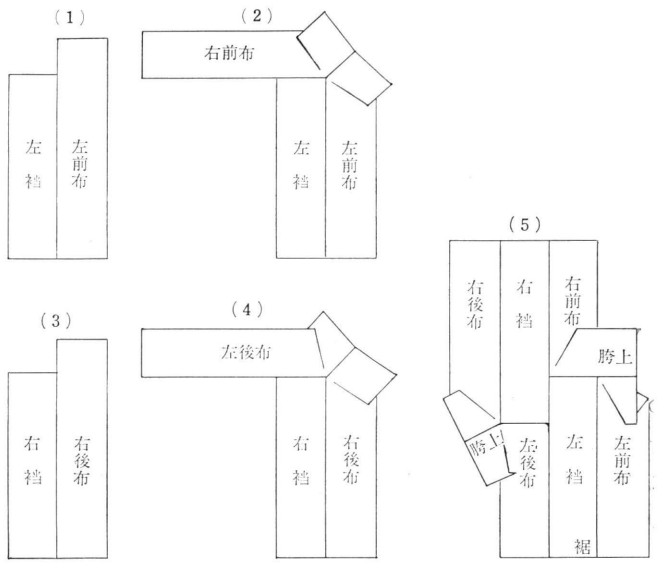
縫い方

引返し仕立について述べる。

5図 袴の裁ち方図



6図 袴の縫い方図



1. 左前襠付け 左襠で前布をはさんで裾より襠の上部まで四つ縫いにして襠の方へ折り表返す。

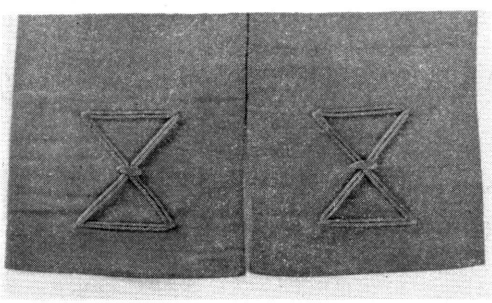
2. 前股上縫い 右前表布と左前股上を3枚で縫い合わせ，つづけて左襠上部の幅を3枚で縫い合わせ右前布の方へ折り返し，右前裏布を股上，襠上部の縫い目にくけつける。

3. 右後襠付け 右襠で右後布をはさんで裾から襠上部まで四つ縫いにし襠の方へ折り返す。

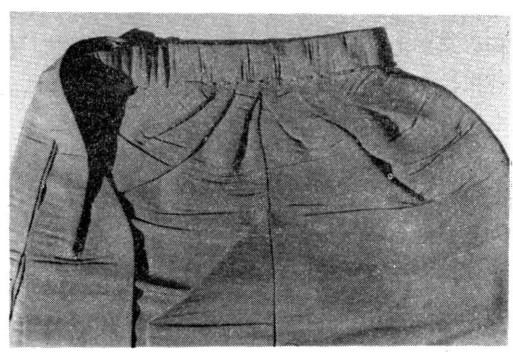
4. 右股下縫い 右表襠布と右前股下とを3枚で縫い合わせ，つづけて左襠上部を3枚で縫い合わせ右襠布の方へ折り返し，右襠裏布を股下，襠上部の縫い目にくけつける。

5. 後股上・左股下縫い 左後表布と右後布を3枚で縫い合わせ，つづけて後襠上部の幅および左股下を3枚で縫い合わせ左後布の方へ折り返し，左後裏布を股上・左股下の縫い目にくけつける。

7図 紐先の飾繍



8図 袴腰立出来上り



6. 脇明縫い 脇明の間，中表にして表を1cm，裏を1.4cmの縫い代で縫い合わせ裏の方へ折り表返して0.2cm裏を控え，前後左右同じように作る。

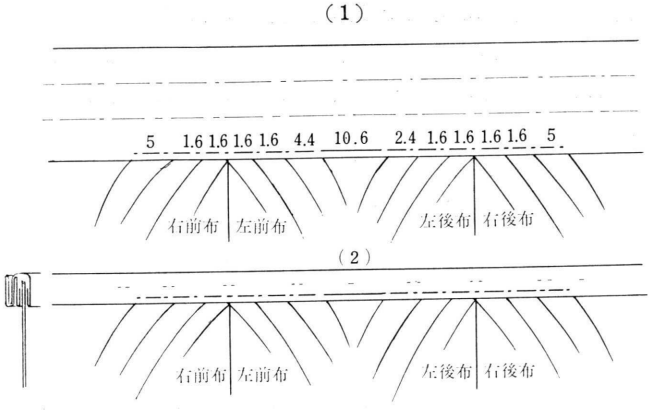
7. 相引縫い 左前表布と左後布とを3枚で縫い合わせ前布の方へ折り，前裏布を縫い目にくけ

つける。右の相引も同様にして縫う。

8. 襞のとり方 前後とも脇明より笹襞幅を 7.5 cm にして寄襞幅を 5 cm とし中央は襞山を突き合わせにして8図のように襞をとる。

9. 腰の立て方 ① 紐先を14 cm 裏の方へ折り，次に腰幅を19 cm に折って腰立の間を残して紐をくける。② 腰立の間，上部の縫い代を腰ではさみ，紅の太白糸2本合わせて腰の裏側まで針を通して9図(1)のように襞山をおさえる。③ 腰幅を三つ折りにして細い太白糸で表裏に小針を出して8図，9図(2)のようにとじる。④ 紐先に紅の太白糸2本合わせて立鼓(りゅうこ)の飾り縫いを表裏同じに刺す。（7図）

9図 袴の腰の立て方

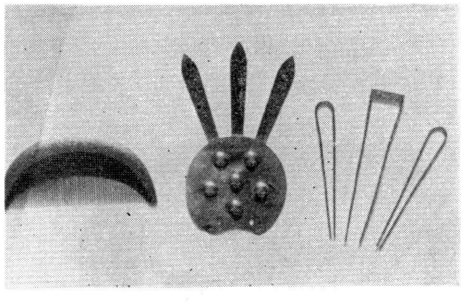


平額・釵子・櫛（寶髻）

平額・釵子・櫛は髪上げに用いるものである。寶髻はたかもとゆいといい金玉をもって髻の緒を飾るところからこの名がある。公家の女子は常に垂髪であったが高貴のものは儀式の時は髪上げ（結髪）をして額・釵子を飾った。古くは髪飾として櫛・髻華(もとづら)（木の葉や花をさす），鬘（木の皮や蔓・枝を頭に巻き垂れる）などが用いられたようであるが，奈良朝頃には釵(かんざし)・櫛・髢などを用い，儀式の際は特に結髪の上に絢爛な装飾を施すことが行なわれた。この装飾は吉祥天像に見るように唐代の宝鈿が金銀の雉や花枝を髻に飾っている風にならったものと見られるが，身分によって異なっていたようである。始めの頃の髪上げは装飾をつけるために頭上に高く髻をつくっていたがこの髻が次第に小さくなり余りの毛を左右後の三方に垂らす風が行なわれ，後にはこの髻が垂髪に変り

10図 髪上げの図

11図 平額・釵子・櫛



髢を使って髷をつくることが行なわれた。これが衣服令にいう義髷である。これを自分の髪にすえて釵子でとめ，櫛をさすものもあった。時代を経るに従い髷の様式が変るにつれて装飾も変化し，平安時代

12図 丸 髢（玉髢）

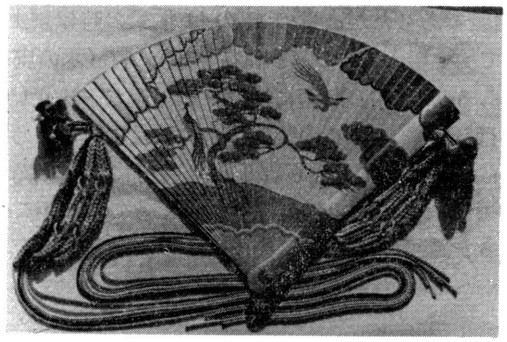
には額（蔽髪ともいう）・釵子・櫛を用いるのが普通になった。鎌倉時代以後は額を平額と呼ぶようになり，室町時代になってその形も変り丸形に三本の突起が立つようになった。中世は2本の釵子で髷をとめていたが，近世は3本用いるようになった。櫛は黄楊，銀などでつくられ，蒔絵や彫で装飾された優美なものである。今日では十二一重の場合は髪上げは大垂髪（お大）に結ひ，つとうら（仙花紙を数枚重ねて厚く貼りかため，黒く塗ったもの）を用いて鬢を大きく張らせて長髢（2m 30cm）をつけ，頭上に丸髢（玉髢）をすえ，その前に平額をあてて釵子で中央をとめ他の2本の釵子を左右より交叉して丸髢にさし紫の紐で結びつけ，次に櫛を平額の前の額髪にさす。

檜　扇（衵　扇）

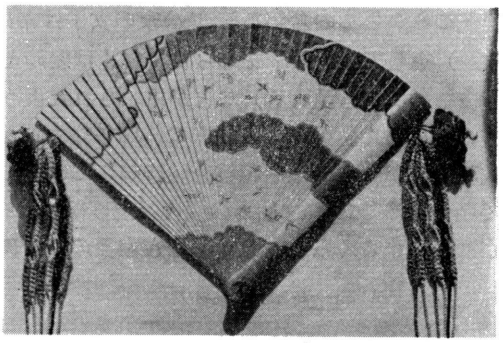
扇は奈良時代には団扇形であったが，平安時代には桧の薄板を糸でとじたもので桧扇と呼んでいた。板数は漸次ふえて男子の桧扇は25枚から28枚で彩色をほどこさず生地のままであり上差の糸で親骨に文様を置いた。女子も古くは男子と同じものを用いていたと思われるが後世に至って板数は39枚となり，扇面は泥絵の極彩色で桐・鳳凰，梅・竹・鳳凰，松・尾長鳥，松・竹・鶴・亀など描かれており，紅白の糸で上差をして左右に朜黄，黄，紅，白，紫，桃色の六色の飾紐で蜷結びをして4尺～5尺（150cm～190cm）垂らし，飾紐の付け根に松，梅，橘などの造花の飾花をつけ，要には蝶，鳥の金具をつける。(14図) この桧扇を衵扇という。飾紐は扇に巻きつけて持つ。

13図　桧　　扇（衵　扇）

（1）

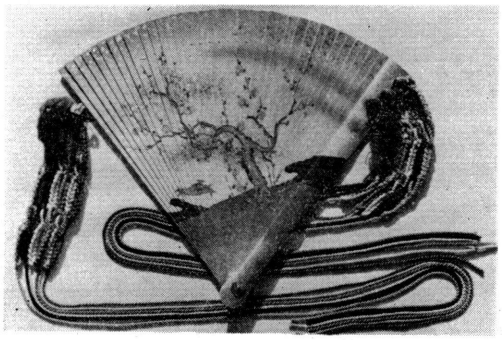


表

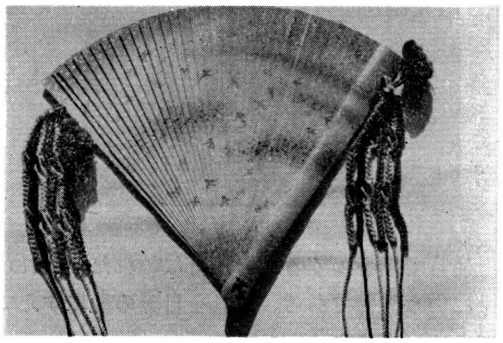


裏

（2）

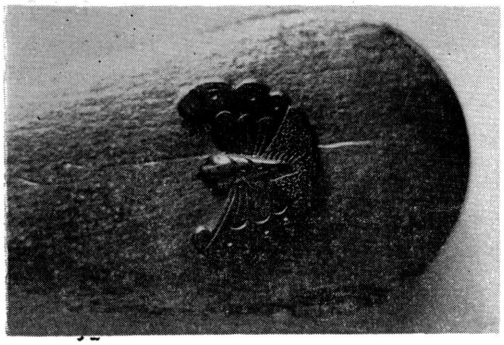


表

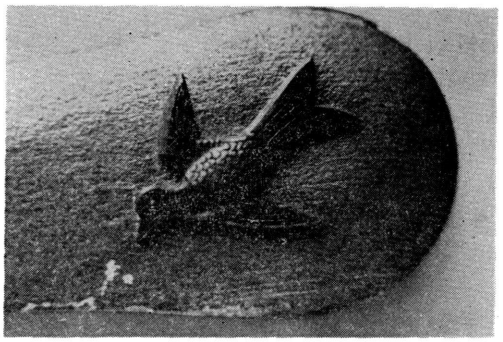


裏

14図 要 の 金 具



表



裏

帖　　紙

帖紙（たとうがみ）は（本学紀要第5集，本研究第3報），男子のものと材料，たたみ方ともに同様であるが，女子の場合は紅を用いこれに金泥で霞や梅などを描くこともある。

襪

襪（しとろず）は足袋の股のない深筒のもので白平絹でつくる。甲の上部があいており先に紐がついていて後縫い目の上部に紐通しの穴があり，これに紐を通して横で結ぶ。（本学紀要第5集7頁参照）（15図）

15図 襪出来上り

結　　び

平安後期に男子の装束の硬化誇張に伴い女子の装束は数多くの重ね着によって誇張され互に優美さを競い合いその絢爛たる豪華さは極に達した。染織技術の発達により浮文，繍，摺，箔置，目結，描など色彩豊かに表現されその技法が長足の進歩を遂げた。この研究により女子の晴装束の概要をつかみ個々にわたってその形態，布地，色，文様，構成，着装について概念を得ることができた。

参 考 文 献

書名	著者	発行所	発行年月日	文献渉猟頁
東京家政大学研究紀要	松井和哥 藤本やす			
第 3 集			昭和38. 2	P. 1～ 8
第 4 集			昭和39. 2	P. 1～ 8
第 5 集			昭和40. 3	P. 1～ 8
第 7 集			昭和42. 3	P. 45～ 53
第 8 集			昭和43. 3	P. 59～ 67
故実叢書	故実叢書編部	明治図書出版株式会社	昭和26. 7. 1〔装束〕	P. 331～478
			〔服飾管見〕	P. 341～370
服装史概説	後藤守一	四海書房	昭和18. 6. 20	P. 157～180
日本服飾史	日野西資孝	恒春閣	昭和29. 8. 15	P. 74～ 79

日本被服文化史	守田公夫	柴田書店	昭和31. 4. 25	P. 73～75.
日本服飾史要	江馬務	星野書店	昭和29. 2. 10	P. 76～77
新修有職故実	江馬務	星野書店	昭和 5. 6. 5	P. 50～52.
装束の知識と著法	八束清貫	文信社	昭和37. 7. 1	P. 122～276.
装束図解	関根正直	国学院	明治32. 10. 15	P. 98～102.
束帯及び五衣の部	東京女子専門学校編纂	渡辺女学校出版部	大正14. 2. 28	P. 65～78.
御殿女中	三田村鳶魚	青蛙房	昭和39. 6. 20	P. 147～163.